

美人タイプと美人ステレオタイプに関する研究

小野 寺 孝 義

本研究は身体的魅力、特に女性の顔面写真を刺激として、いわゆる美人のタイプや美人ステレオタイプ、さらには認知する側である男性の個人差を探索的に吟味したものである。

【問題】

対人認知や対人魅力の研究において身体的魅力の重要性は広く知られている。古典的な Walster (Hatfield) et. al. (1966) の実験では752名(男女各376名)の大学新生を対象に歓迎会でコンピューター・ダンスを行なっている。参加者の性格特性、学業成績、態度を調べ、さらにコンピューター・ダンスに参加するためにチケットを買いに来たときに実験者が大ざっぱな身体的魅力を8段階で評定した。参加者にはコンピューターの診断結果をもとに相性のよい相手とデートの組合せをすると教示された。しかし、実際には男性が女性よりも背が高くなるという条件を除いては、まったくランダムな組み合わせでカップルが構成されるようになっていた。構成されたカップルは1時間半から2時間の間、会話をしたり、ダンスをして過ごした。その後、短い休憩をとり同伴した相手を評価した。一緒にあった相手と、どれほどまたデートをしたいかを調べた結果は、相手に対する評価の唯一の予測因が相手の身体的魅力であり、その他の測定項目では予測することができなかった。このことは、男女ともに当てはまる結果であった。

その他に Kleck and Rubenstein (1975) は態度の類似性と身体的魅力の2つの変数を操作し、実験を行なっている。サクラの女性の魅力をメーキャップにより変化させ、予め男性被験

者が記入した態度測定項目がどれほどサクラの女性と似ているかを告げることで態度の類似性が操作された。男性被験者とサクラの自然な交互作用が設定され、実験直後と2~4週間後の2度にわたり男性被験者は相手の女性についての評価を求められた。

結果は態度の類似性と身体的魅力の交互作用、および態度の類似性の主効果が見られなく、身体的魅力のみが主効果を示した。Kleck and Rubensteinはこの結果から実際の相互作用においては身体的魅力の効果が強力であり、他の効果を圧倒してしまう可能性があるとして示唆している。

このように身体的魅力は対人認知において極めて重要な役割をはたすことが示されてきたが、身体的魅力がある人とはどのような人かについては明確にされていない。従来の研究に於いては多くの被験者が一致して魅力があると評定する刺激人物が身体的魅力があるとされてきた。Bersheid and Walster (Hatfield) (1974) はレビューの中でこのような、コンセンサスによる魅力の評定がかなり一貫しており、信頼できるものであると述べている。実際、レビューで報告されている評定者間の相関は0.7から0.9以上ときわめて高いものである。

しかしながら、ほとんどの人間が身体的魅力に関して同じ評価を下すという結論は簡単にはくたせない。なぜなら、先行研究では魅力の程度において幅のある雑多な刺激人物を評定させ、その一致度についてみているからである。魅力の程度がある程度高い、即ち、美人と呼ばれるような刺激人物のみに刺激を限定してみれば、そこに様々なタイプの美人が現われ、被験者の

個人差を反映した美人タイプが顕在化してくる可能性がある。

そこで本研究では身体的魅力において高い評定を得た刺激のみを用い、そこにみられる刺激のタイプを検討し、同時に従来、欧米の研究で繰り返し確認されてきた美人に関するステレオタイプを吟味した。

【方法】

刺激の選定：男子大学生12名に対して50名分の女性の顔写真をスライド提示した。スライドの刺激は芸能関係の写真雑誌やファッション雑誌、広告から選定したものである。各スライドの女性は肩から上を写したもので、眼鏡や特別なアクセサリはつけていず、ほぼ正面から撮られていた。各スライド刺激について思いついた簡単な印象や言葉を3つ以上挙げさせ、さらにどの程度美人と思うかを5段階（非常に美人5－美人ではない1）で評定させた。美人評定の結果から、平均点が3点以上で標準偏差が小さい13枚のスライドを本研究の刺激とした。

被験者：本研究の被験者は工業大学の男子大学生111名である。実際には欠損値のある2名を除いた109名が分析の対象となった。

手続き：集団で調査を行なった。13枚の女性顔写真を順にスライド提示し、それに対して質問項目に評定を求めた。

質問項目：質問項目は刺激選定の時点で評定者が挙げた印象や形容詞に加えて、類語辞典などから美人を表現するのに適当と思われる項目を入れた47項目とした。その他にスライド刺激がいわゆるアイドルなどの場合が多かったので知名度の効果を見るために、どの程度その女性を知っているかについても評定を求めた。また、その女性と関係を持つと想定した場合の評定（例えば、恋人としてはどう評価するかなど）や、その女性の性格がどのようなものであると推定するかについても16項目の性格関連項目について評定を求めた。質問項目はすべて7段階尺度であった。その他に家族構成についても記入を求めた。

表1 各刺激の美しさの順位と因子との関係

美しさの順位	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
1	真面目／知性	セクシー		ロリータ	
2	社交性	セクシー			ロリータ
3	セクシー	真面目／知性	社交性	ロリータ	
4		性格			
5	セクシー		性格		
6		ロリータ			
7	性格	セクシー			
8	ロリータ		真面目／知性	セクシー	
9	性格			セクシー	
10		セクシー		真面目／知性	
11	セクシー	ロリータ	性格	社交性	
12		性格	セクシー	真面目／知性	
13	性格	ロリータ	セクシー	社交性	

注) 1が被験者により最も美人と評定された刺激であり、13が最もそうではなかった刺激である。

【結果】

刺激人物を知っているか否かは他の変数と0.26から0.56の相関を持っていたが、より知っている群とより知らない群にわけて分散分析を行なった結果には各項目で有意差がみられなかった。各刺激ごとに女性を形容する表現と性格項目を用いた主成分分析を行ない、バリマックス回転を行った。各刺激で共通すると考えられる5つの因子が見出された。因子はセクシー因子、性格因子、ロリータ因子、真面目・知性因子、社交因子と名付けられた。セクシー因子は“エロチック、セクシー、肉感的、官能的、色っぽい”などの項目に負荷する因子であり、性格因子は“温和、親切、あたたかさ、やさしさ、寛大さ、誠実”などの項目に負荷していた。ロリータ因子は“あどけない、幼顔、ういういしい、いたいけ、可憐”などの項目に、真面目・知性因子は“知性、利口そう、真面目さ、誠実さ、おとなしさ、親切”の項目に、そして社交因子は“明るさ、社交性、面白さ、積極性”の項目にそれぞれ主に負荷していた。13枚の刺激を美しさの順に並べ、各因子の表れ方を示したのが表1である。

表1は刺激の美しさに従って必ずしも一貫した因子の表れ方を示していない。空白になって

いる部分は各刺激に共通の因子として現われなかった因子であることを示している。全ての刺激が美人として認知されたものであることを考えるならば、美人といっても様々なタイプがあることが分かる。

13枚のスライド刺激に対する反応の平均をとり、主成分分析を行なった。各因子の固有値は第1因子からそれぞれ、31.032, 3.244, 1.395, 1.085であり、分散説明率はそれぞれ、66.0%, 6.9%, 3.0%, 2.3%であった。第1因子が大部分の分散を説明していることは項目がもともと美人を表現するためのものであり、かつ社会的望ましさを反映しているポジティブな項目であることから説明できる。第1因子は一般的な社会的望ましさの因子とみることができるとも知れない。

表2はバリマックス回転を行なった結果を示している。第1因子は幼さに関する因子と解釈でき、ロリータ因子と命名した。第2因子は性的な魅力に関する因子と解釈でき、セクシー因子と命名した。第3因子は美しさやかわいさに関する因子であり、かわいさ因子と命名した。第4因子は明確ではないが品の良さに関する因子と解釈できる。

表2 13枚の刺激を平均化して主成分分析を行い、バリマックス回転を実施した結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
あどけない	0.80440	0.20897	0.31115	0.17160
可憐	0.77545	0.34376	0.31944	0.14087
初々しい	0.75611	0.24294	0.38922	0.23535
いたいけ	0.74689	0.33289	0.25454	0.19929
無垢	0.73242	0.29418	0.29743	0.11300
清楚	0.70680	0.20884	0.40100	0.37234
親しみやすい	0.69662	0.27811	0.45195	0.05983
幼顔	0.69487	0.18377	0.41362	0.08543
スポーティ	0.69443	0.36148	0.29969	0.12174
楚楚	0.69132	0.32520	0.29734	0.03015
いとoshii	0.68004	0.33914	0.37050	0.20152
しとやか	0.67009	0.17037	0.40561	0.47513
大人しい	0.65199	0.13027	0.27301	0.47210

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
キュート	0.65063	0.40892	0.44508	0.17438
精悍	0.64969	0.23628	0.33576	0.34002
高尚	0.64744	0.34932	0.24842	0.32284
エロチック	0.11173	0.86764	0.26152	0.11952
けばけばしい	0.09904	0.83288	-0.05343	-0.00987
派手	0.17437	0.79042	0.28243	-0.02286
肉感的	0.26777	0.77136	0.27937	0.15637
気高い	0.19430	0.72511	0.30722	0.40990
神秘的	0.41248	0.69363	0.12120	0.29486
妖美	0.41265	0.68198	0.11065	0.34308
セクシー	0.35946	0.67347	0.47849	0.09377
きらびやか	0.48306	0.64966	0.36411	0.16714
官能的	0.39525	0.63070	0.42148	0.07873
垢抜け	0.28132	0.58040	0.25170	0.20185
麗しい	0.58975	0.54574	0.27321	0.25710
あでやか	0.43087	0.54498	0.48690	0.26420
鮮やか	0.45793	0.52786	0.39931	0.32766
美しい	0.38194	0.32761	0.75175	0.23692
チャーミング	0.52883	0.25689	0.71262	0.12793
可愛い	0.47315	0.33718	0.70181	0.16882
きれい	0.37360	0.42040	0.69547	0.26227
若々しい	0.51888	0.13737	0.68796	0.14398
愛嬌	0.53122	0.30144	0.68775	0.08268
女らしい	0.48081	0.15829	0.67741	0.32319
色っぽい	0.33338	0.52671	0.67287	0.14762
愛くるしい	0.57518	0.31812	0.64659	0.11099
清潔	0.59800	0.18562	0.58241	0.29183
端正	0.40912	0.43089	0.54119	0.32856
優美	0.52761	0.42053	0.53034	0.31274
上品	0.62920	0.18275	0.52366	0.43910
明るい	0.63025	0.31961	0.51267	0.00535
りりしい	0.61970	0.47758	0.27401	0.02200
さっぱり	0.39798	0.48010	0.16614	0.50010
利口そう	0.21206	0.42847	0.31926	0.66359

次に各刺激に対する被験者の個人差を検討するために13の刺激を平均化したデータに対してQモードの因子分析を実施した。分析には美人表現項目と性格項目の両方を投入した。各因子の固有値、累積分散説明率が表3に、各被験者のプロットが図1に示されている。

表3 Qモード因子分析の結果

因子	固有値	累積分散説明率
1	49.5540	45.46
2	6.6581	51.57
3	4.8145	55.99
4	4.5264	60.14
5	3.6540	63.49
6	3.1741	66.41
7	2.8933	69.06
8	2.8513	71.68
9	2.1448	73.64
10	1.9882	75.47

図1

注) 変数は全て平均0、分散1に規準化してある。

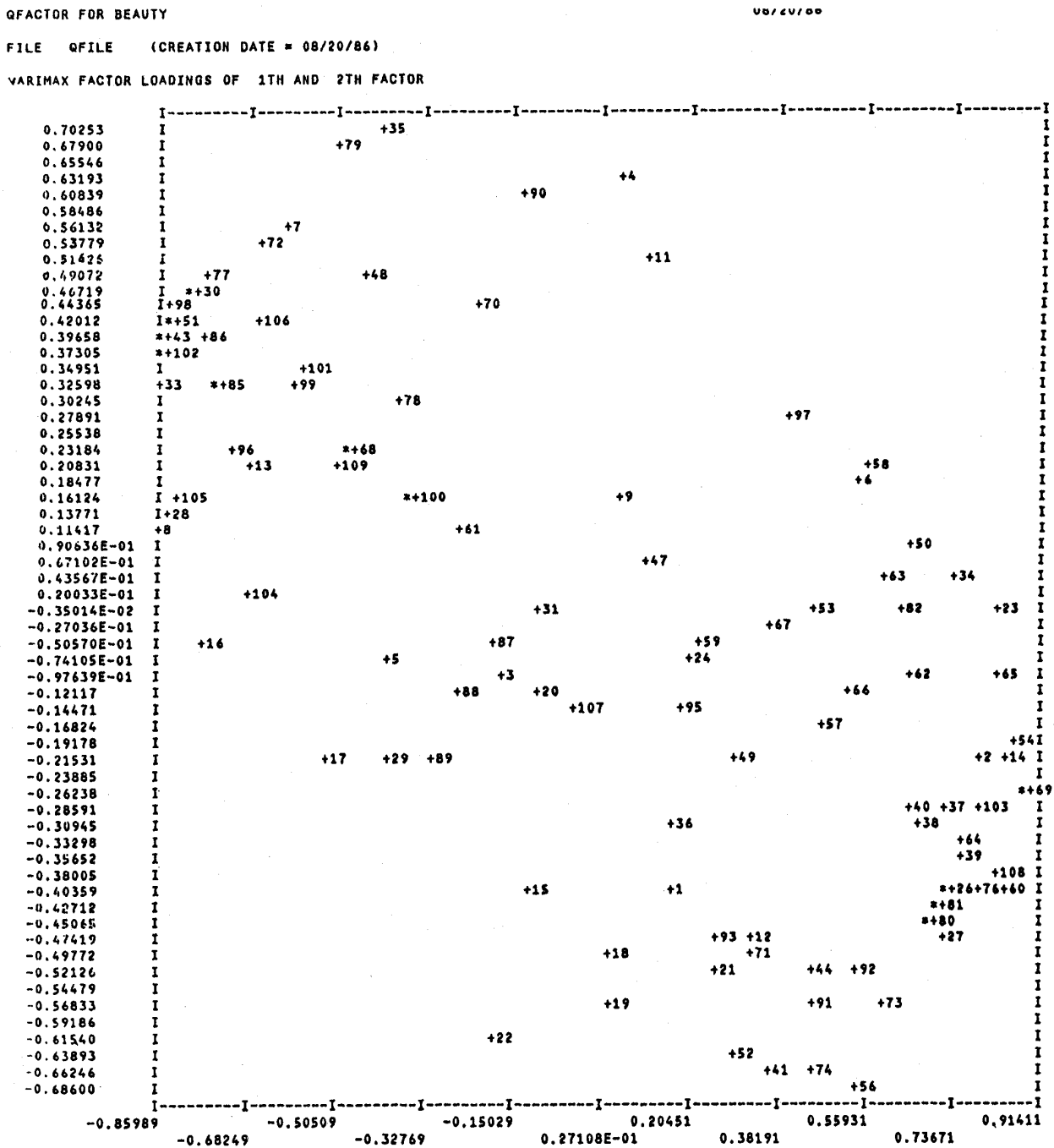


図1は第1因子と第2因子のプロットであり、各数字のプロットは被験者を表わしている。大きく左上と右下にクラスターがあることがわかる。これらを第1因子と第2因子、それぞれ座標値0を境に4つのグループにわけた。第1因子が0以上で第2因子も0以上の被験者をグループ1、第1因子が0より小さく、第2因子が0以上の被験者をグループ2、第1因子が0以上で第2因子が0より小さい被験者をグループ3、いずれの因子も0より小さい被験者をグループ4とした。各グループはグループ1が10名、グループ2が37名、グループ3が49名、グループ4が13名であった。

各グループ（刺激に対する個人差を示している）を判別するにはどの変数が効果的かを吟味するために分析を行なった。ここでは被験者の

兄弟関係が女性に対する評価に影響している可能性を考慮し、兄弟の有無を変数として加えた。兄弟は“いるか、いないか”を0、1反応で得ていたので分析に当たっては判別分析ではなく、カテゴリカルなデータに関する解析法を利用した。具体的には統計数理研究所の坂元（1985）により開発されたカテゴリカルデータ分析プログラムCATDAP02を用いた。CATDAP02はカテゴリカルデータからなるクロス表において予測変数をもっとも説明する変数、及び変数の組合せを情報量統計基準AICに基づき探索するプログラムである。

各グループを予測変数とし、1変数による最適予測変数を見たものが表4、変数の組合せを指定したものが表5に示されている。

表4 CATDAP02による分析結果
(1変数の場合)

説明変数	N OF C	AIC	AICの差
清楚	2	-75.38	0.00
しとやか	2	-75.09	0.29
かわいい	2	-74.88	0.21
可憐	2	-74.23	0.65
協調的	2	-70.83	3.40
温和さ	2	-70.51	0.33
やさしさ	2	-70.30	0.21
初々しい	2	-68.08	2.22
キューート	2	-66.36	1.72
誠実さ	2	-66.13	0.24
愛くるしい	2	-66.10	0.03
鮮やか	2	-65.19	0.91
チャーミング	2	-63.74	1.45
おとなしさ	2	-63.03	0.71
親しみやすい	2	-62.43	0.60
あたたかさ	2	-62.42	0.01
愛敬	2	-61.36	1.06
きれい	2	-60.95	0.41
あでやか	2	-60.77	0.19
いとoshii	5	-60.06	0.70

表5 CATDAP02による分析結果
(変数を組み合わせた場合)

説明変数	N OF C	AIC	AICの差
清楚&温和さ	4	-102.46	0.00
清楚&鮮やか	4	-98.53	3.93
清楚&温和さ &鮮やか	8	-97.58	0.96
清楚&親しみ やすい	4	-96.97	0.61
温和さ&鮮やか	4	-96.80	0.17
清楚&温和さ &あでやか	8	-96.67	0.13
清楚&温和さ &可憐	8	-95.62	1.05
清楚&温和さ &親しみやすい	8	-95.61	0.01
清楚&温和さ &愛くるしい	8	-94.45	1.16
清楚&あでやか	4	-94.05	0.39
清楚&温和さ &かわいい	8	-93.80	0.26
清楚&しとやか	4	-92.67	1.13
清楚&きれい	4	-92.28	0.39

注1) N OF Cはカテゴリ数を示す。

注2) 分析では素点を用い、等間隔の自動カテゴリを指定した。

兄弟関係はグループを判別する変数としては有効ではなかった。最もA I Cが小さくなる変数の組合せである“清楚さ”と“温和さ”についてクロス表を構成したものが表6である。“清楚さ”と“温和さ”、いずれも低い評定を下す男性と、いずれにも高い評定を下す男性で大きくタイプが分かれることがわかる。

表6 4タイプを清楚さと温和さの2変数により表わした結果

被験者グループ	1	2	3	4	計
TYPE 1	3	30	0	0	33
TYPE 2	1	2	1	1	5
TYPE 3	5	4	4	9	22
TYPE 4	1	1	44	3	49
	10	37	49	13	109

注)

TYPE 1 = 1.00 < 清楚さ = < 3.15
1.17 < 温和さ = < 3.75

TYPE 2 = 1.00 < 清楚さ = < 3.15
3.75 < 温和さ = < 5.08

TYPE 3 = 3.15 < 清楚さ = < 5.17
1.17 < 温和さ = < 3.75

TYPE 4 = 3.15 < 清楚さ = < 5.17
3.75 < 温和さ = < 5.08

次に美人ステレオタイプについて調べるために13の刺激を美しさの程度により、より美しい群（3刺激）とより美しさが劣る群（3刺激）、中程度の群（7刺激）に分けて性格項目について多変量分散分析（MANOVA）を行なった。結果はWilks's Lambda が0.75291でF値が13.455、有意水準0.01%で差があった。MANOVAが有意であったので次に単変量の分散分析（ANOVAs）を行なった。結果は表7に示されている。

各項目についての項目平均と、多重比較を考慮したt検定の結果が表8に示されている。また、関係性について尋ねた項目についての結果が表9に示されている。

表7 性格項目に対する分散分析

	F値	有意水準
自信	42.44602	0.0000
意志	34.02902	0.0000
真面目さ	43.45941	0.0000
誠実さ	71.96597	0.0000
親切さ	79.10018	0.0000
社交性	4.91645	0.0070
協調性	38.20690	0.0000
積極性	14.86793	0.0000
あたたかさ	83.37243	0.0000
温和さ	93.13364	0.0000
明るさ	29.02370	0.0000
おもしろさ	17.34368	0.0000
やさしさ	87.33263	0.0000
おとなしさ	88.49298	0.0000
知性	10.37211	0.0000
寛大さ	19.16118	0.0000

表8 美しさの程度により刺激を3群に分けたときの平均得点と下位検定結果

	美しさの程度			
	HIGH	MEDIUM	LOW	
真面目さ	4.3 **	3.6 =	3.7	
誠実さ	4.5 **	3.5 =	3.5	
親切	4.6 **	3.6 =	3.5	
協調性	4.2 **	3.5 =	3.4	
あたたかさ	4.4 **	3.4 =	3.3	
温和さ	4.4 **	3.4 *	3.2	
明るさ	4.4 **	3.7 =	3.6	
面白さ	3.7 **	3.3 =	3.1	
やさしさ	4.6 **	3.5 =	3.4	
おとなしさ	4.3 **	3.1 =	3.1	
知性	3.7 **	3.3 =	3.5	HI=LO
寛大さ	3.7 **	3.2 =	3.1	
自信	3.3 **	4.1 =	4.1	
意志	3.5 **	4.2 =	4.3	
積極性	3.6 **	4.0 =	4.1	
社交性	4.0 =	4.1 =	3.9	HI*LO

注) **は1%水準, *は5%水準, =は有意差なし

表9 美しさの程度により刺激を3群に分けたときの関係性項目の平均得点と下位検定結果

	美しさの程度		
	HIGH	MEDIUM	LOW
恋人として	4.9 **	3.4 **	2.9
結婚相手として	4.2 **	2.6 *	2.4
女友達として	4.8 **	3.7 =	3.6
姉として	3.7 **	3.1 *	2.8
仕事の同僚として	4.3 **	3.5 =	3.4
妹として	4.3 **	2.7 =	2.8

注) **は1%水準、*は5%水準、=は有意差なし

自信、意志の強さ、積極性、社交性の項目を除くと、ほとんどの社会的に望ましい内容を反映する項目で美しい刺激人物が高い評定を得ている。また、関係性についての項目も、どのような関係にせよ美人であるほどより高い評定を得ている。これらは美しい人は、よりよい性格特性を有するとする美人ステレオタイプの存在を示している。

“美しい”という項目と関係性に関する項目との相関係数が表10に示されている。

表10 “美しい”と関係性項目との相関

	美しい
恋人として	0.7695
結婚相手として	0.7460
女友人として	0.7026
姉として	0.5998
仕事の同僚として	0.5969
妹として	0.5570

性格項目と“美しい”という項目の相関では最高が“明るさ”との相関で0.718であったことを考えると恋人や配偶者としての評価と“美しさ”の相関がきわめて高いことが分かる。

【考察】

因子分析によって得られた結果は美人タイプ

が一様ではなく、かつ美しさと現われる因子の順に一貫性がみられないことを示している。

但し、13の美女刺激において得られた因子にはかなり共通するものがみられた。幼さに関する因子が現われたことは男子大学生のロリータ指向を示すものと考えられることができるかも知れない。これは芸能界などのスターの低年齢化や女性が社会で強くなるにつれ、男性がその男らしさを主張しうる対象として年少者により魅力を感じがちになっていることの反映と解釈できるかも知れない。13の刺激に対する反応を平均したデータに対する因子分析は13人の各美人を一般化した美人データへの因子分析と見ることができる。結果は選択した項目が、かなり社会的に望ましい項目に偏っていることを反映するものとなった。被験者の個人差を見るために実施したQモード因子分析の結果は刺激に対する反応がかなり一貫したクラスターを構成することを示している。この個人差を吟味するために行なったCATDAP02の分析は、しかしながら直観的に理解し易いものではなかった。このことは判別に用いた変数が美人表現項目や性格項目に限定され、各被験者の個人プロフィールについては多くの情報を採っていなかったことに起因する。兄弟関係についても単に兄弟がいるかないかを調べたのみであり、年齢差や家族構成を厳密に調べていかなくは女性に対する認知に兄弟関係が影響がないと結論することはできない。今後の課題としては女性に対する個人差を反映すると考えられる項目、例えば、現在・過去の女性経験や女性に対する態度についての情報を含めて研究を行うことが考えられる。

美人ステレオタイプに関しては従来の欧米の研究がそのまま確認された。美しい人は好ましい属性を持つとする美人ステレオタイプが見出されている。但し、意志の強さや自信、積極性などの項目では逆に美人ほど低い評定を得ており、男性的な特性などに関しては美人ほど低い評定を得ることが分かる。このことは Heilman & Saruwatari (1979) の伝統的に女性が適しているとされる職業では美人は有利だが強力な組織

で高い地位を目指すには美人は不利であるとする報告を支持するものと考えられるかも知れない。

関係性について尋ねた結果は Walster (Hatfield) らのコンピューター・ダンスの結果を支持している。美しい人ほど恋人や配偶者として高い評定を得ている。ここでは単に刺激を提示してそれに対する反応を調べただけであり、現実の交互作用では他のライバルとの競争、相手から拒否される恐れ、自己評価などの変数が複雑にまじり、ほぼ自分に見合った魅力の相手に妥協するであろうことが予想される。しかし、状況さえ許せばより美しい女性を求める動機が男性にあることがわかる。今後の研究では人はどの刺激に対して美しいと反応しているのか、また配偶者選択に美しさが大きな影響力を持つとすれば美しさは自然選択の淘汰因として働いているわけで、進化上の利点は何かなどが研究課題として残るといえよう。

本研究の一部は1986年の日本心理学会において発表されたものである。

【文献】

- 1) Bersheid, E., & Walster (Hatfield), E.
Physical attractiveness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, 1974, Vol. 7, 157-215.
- 2) Heilman, M. E., & Saruwatari, L. R.
When beauty is beastly: The effects of appearance and sex on evaluations of job applicants for managerial and nonmanagerial jobs. *Organizational Behavior and Human Performance*, 1979, Vol. 23, 360-372.
- 3) Kleck, R. E., & Rubenstein, C.
Physical attractiveness, Perceived Attitude Similarity, and Interpersonal Attraction in an Opposite-Sex Encounter. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, Vol. 31, No.1 107-114.
- 4) Walster (Hatfield), E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L.
Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1966, Vol. 4, No.5, 508-516.
- 5) 小野寺孝義 美人認知と美人ステレオタイプに関する研究, 日本心理学会50回大会発表論文集, 1986.
- 6) 坂元慶行 カテゴリカルデータのモデル分析, 共立出版, 1985.
- 7) 坂元慶行, 石黒真木夫, 北川源四郎, 情報量統計学, 共立出版, 1983.
- 8) 三宅一郎, 中野嘉弘, 水野欽司, 山本嘉一郎, SPSS統計パッケージII解析編, 1977.

ABSTRACT

A Study about Types of Beauty and Beauty Stereotypes.

TAKAYOSHI ONODERA

Psychology Course, Division of Primary Education, Tokai Women's Junior College, Japan

The purpose of this study was to investigate types of physically attractive persons and stereotypes of beauty. Many studies indicate that physical attractiveness is a very important factor for dating behavior and spouse selection. In addition to these researches, some investigators suggest there is a common consensus for evaluating female stimuli high in physical attractiveness.

In this study, 13 slides of female faces, which were evaluated being as beautiful in a pretest, were used as stimulus. 111 subjects evaluated those stimuli for various aspects.

Results of PCA indicated that there is no consistent pattern between attractiveness of stimuli and factors. However, five factors; 'SEXY', 'PERSONALITY', 'LOLITA', 'SINCERITY-INTELLIGENCE' and 'SOCIABILITY', were identified common factors and having same attributes. Q-mode factor analysis showed there are clusters of subjects for reflecting individual differences.

According to the degree of attractiveness, stimuli were divided into three groups and MANOVA and ANOVAs were performed. Results confirmed there is "beauty stereotype" in Japan as well as western countries. Subjects evaluated "High attractive" stimuli persons having many socially desirable characters, while "Low attractive" not having. However, "Low attractive" stimuli persons got high evaluation in some characters, which were generally characterized as masculine attributes.

Correlations between "beautiful (utukusii)" and other items indicated there is strong tendency in male subjects to obtain a physically attractive person as a dating partner or a spouse.